

# 「資本論を読む会」便り

No. 24  
2017.7.9

商品の物神性のところの2回目です。今回も「便り」編集人が報告を行ないました。本文を繰返し読んでいて、主語と述語が遠く離れていたり、修飾語(句)が修飾する対象の語や句がどれか分かりにくい、と強く感じました。今まで読んだところは分かりやすかったということではなく、レジュメ作成を意識していたからだと思います。さりとて翻訳が分かりにくければ原書で、という訳にもゆきません。こっちはもっと分かりませんから!!

## ◆第25回の内容

※ 編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとにカウント)。

参照ページ番号を原著ページで表すことにしました。テキストによってページ番号は異なりますが、大抵原著ページ番号も記されているので、その方が便利だというご指摘がありましたので。

### 第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

※ 物神的: 全集版資本論(岡崎訳)では「呪物的」です。「物神的」のほうが一般的なようです。

#### 【前回の復習】

最初、「便り」第23号を使って前回読んだ第1～4段落を簡単に復習しましたが、この第4節全体の、第1章の中での位置づけが議論になりました。

第1～3節では、商品が前提にされています。商品はわれわれの目の前に、そこら中に溢れています。この商品をつかまえて、それがどんな性質・属性を持っているかが分析されました。すなわち

第1節 商品は使用価値と価値を持つ。価値の実体は抽象的人間労働

第2節 商品に表された労働の二重性

第3節 商品の価値が別商品によって表現される仕組みとその発展  
ということでした。

それに対し、第4節 商品の物神的性格とその秘密 では、

労働生産物はどうのような条件のもとで商品となるのか

が課題です。商品が物神的性格を持つのはそれが商品だからです。したがって、どのような社会的な条件が労働生産物を商品にし、それらの条件がどのように商品の性格に反映するのか、が問題になります。

この節を読み進める上で、こうした事を念頭に置いて読めば、理解が深まるのではないかと思います。

**【第5段落】** (87) このような、商品世界の呪物的性格は、....

商品世界の物神的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずる

短い段落ですので、要点といってもほぼ原文通りです。

まず、「前の分析」とは、この節の第1～4段落を指していると思われます。そこでは、労働の社会的性格が、生産物の対象的性格、生産物の(社会的な自然)属性として反映する。生産者たちの社会的関係が、生産物の社会的関係として反映する。とのべられていました。この「社会的性格」がこれから明らかにされていくということのようです。

**【第6段落】** (87) およそ使用対象が商品になるのは、...

使用対象が商品になるのは、互いに独立して営まれる私的労働の生産物だからである。

私的労働の独自の社会的性格は、商品の交換においてはじめて現われる。

(1) 使用対象が商品になるのは、互いに独立して営まれる私的労働の生産物だからである。

(2) 個々の私的労働の全体(複合体)は社会的総労働をなす。

(3) 生産者の私的労働の独自の社会的性格は商品の交換においてはじめて現われる。

∵ 生産者は、生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するから。

(4) 言い換えると、私的労働は、

交換によって、労働生産物がおかれる関係

労働生産物を介して生産者たちがおかれる関係

によって、はじめて実際に、社会的総労働の諸環として実証される。

(5) 生産者たちにとって、彼らの私的労働の社会的関係は、あるがままのものとして現われる。

すなわち、個人の物的な関係として、物の社会的な関係として現われる。

諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではない。

上記(3)がこの段落のポイントのようです。

私的労働の全体が社会的総労働をなし、社会的に関連し合っています。ですが、生産物ができただけでは関連性は、まだ現実のものではありません。実際に交換が行なわれることによってはじめて現実のものとなります。関連性は事後的に証明される、と表現された方もいました。

この段落でマルクスが言いたいことは、人間の関係(私的労働の関係)が商品の関係として現われる、見えてくる、ということかと疑問が出されました。

「現われる」は良いですが、「見えてくる」というのはやや不正確かと思われます。人間の関係が商品の関係として現われていることは、商品进行分析してはじめて分かることです。生産者にとっては(この社会の人間には)、商品と商品の関係が見えるだけです。それが「あるがままのものとして現われる」ということです(要約の(5))。

第1～4段落で、商品の歴史的な性格、商品の物神的性格について述べられたが、その原因をこの段落で言っている、という指摘もありました。

「私的労働の独自の社会的性格」の「独自の」とはどういうことかという質問に対し、他の社会と比べてということだ、という発言がありました。他の社会との比較は、少し先の段落で出てきますが、中世の農奴の労働の性格は、現代の労働の性格とは異なります。そういう比較で「独自の」と言っています。

#### 【第7段落】(87-88) 労働生産物はその交換の内部においてはじめて、...

##### 労働生産物が交換の中で価値対象性を受取る条件

- (1) 労働生産物は、交換の中で、はじめて、価値対象性(使用対象性と区別された)を得る。  
この有用物と価値物への分裂は、交換が十分な広がりや重要性をもつようになって、はじめて実証される。
- (2) この瞬間から、私的労働は二重の社会的性格を得る。
  - 1) 私的労働は、一定の有用労働として一定の社会的欲望を充足させる。  
社会的分業(自然発生的)の諸環として実証する
  - 2) 私的労働(有用労働)が、他のすべての有用な私的労働と同等である。  
抽象的人間労働としてもっている共通な性格への還元(約元)されたということ。
- (3) 私的労働の二重の社会的性格の、私的生産者の頭脳への反映  
→ 実際の生産物交換であられる諸形態でのみ反映  
私的労働の社会的に有用な性格 → 労働生産物は他人のために有用でなければならぬ  
異種労働の同等性という社会的性格 → 異なる有用物が、共通な価値性格を持つ

「有用物と価値物への分裂」について質問があり議論になりました。「価値物」という語はこれまでも出てきましたが、ここではどういう意味で使われているかが焦点です。

労働生産物が交換目的で生産され交換の場に現われるとき、その労働生産物は生産者にとっての使用価値(有用物)ではありません。では何ものなのかというと、交換可能なものとして登場しています。このことを「価値物」と言っていると思われます。レジュメでは次のような例をあげています。

例：農家は、収穫した米を、一部は自家用、残りを出荷用にする。

自家用が有用物、出荷用が価値物、というような意味と考えられる。

また、「価値物」に関して、バイキングの取引の話が紹介されましたが、大変分かりやすい説明でした。大略、次のような話だったと思います。

北欧ノルウェーのバイキングが、極寒の不毛の地で一大勢力を築き、さまざまところに

出かけて行くようになったのは、干し鱈<sup>タラ</sup>の製法を発明したことによるそうです。

干し鱈そのものは、ある時期に大量に取れる鱈を、不漁期の備えとして利用するのが目的で、当初はその限りでは一つの「有用物」に過ぎません。

干し鱈は長期保存が可能です。それを他の多くの隣接民族が欲しがり、彼らが持っているものと交換できるということをバイキングは知ると、大量の干し鱈を交換を目的に生産するようになり、それを持って大航海をし色々な地域で小麦や絹など彼らが必要とするさまざまなものと交換するようになっていったということです。それが彼らをして大航海に乗り出させた動機であり、原動力だったというわけです。

こうして、干し鱈は単なる保存食としての「有用物」から、「交換手段」という新たな対象性を獲得した訳です。干し鱈は単なる「有用物」という対象性から、それとは区別された、その対象性から分離した「交換手段」という新たな対象性を獲得したのです。

これがすなわち、ここでマルクスが述べている「価値物」だと思われます。

この段落か1つ前の段落のところで、「人間労働」の定義というか、人間が労働することとはどういうことか、あるいは、人間は彼らの生活をどのように支えあっているか、という質問がありました。

ここで扱われている労働は、人間がその生活を営む上で必要な物を作る労働、衣食住その他に必要な物を作る、そういう労働です。資本主義社会は、この人間労働の関係が、物と物との関係として現われる、そういう社会なのだという指摘もありました。

質問者からは、引き続いて、「自分には障害があって働くことができないし、手に職もない。どうしても、障害者の生活保障とか、障害者運動などを考えてしまう。障害者の労働はこの社会でどういう意味を持っているのだろうか？」と問題提起がありました。

これに対して、資本主義における労働は、労働力の購入とその使用という形で行なわれるため、労働力商品たりうるかどうかの問題とされる、という指摘がありました。それを受けて、資本主義社会では、豊かな労働を実現できていない、とも言われました。「豊かな労働」とは、各人はその能力に応じて働き必要に応じて(労働生産物を)受取る、という意味かと思われます。そんなことが可能なのかと思われる方もおられるかも知れません。

あと別の障害者の方は、資本主義社会のなかで私たち障害者はどう生きていくか・働いていくかは、困難だが重要な問題、と発言されました。

資本主義社会における労働の性格、労働がそうした性格を持つに至る要因・仕組みは、資本論で解明されています。これらの問題も念頭において、資本論を読み進めて行きたいと思えます。